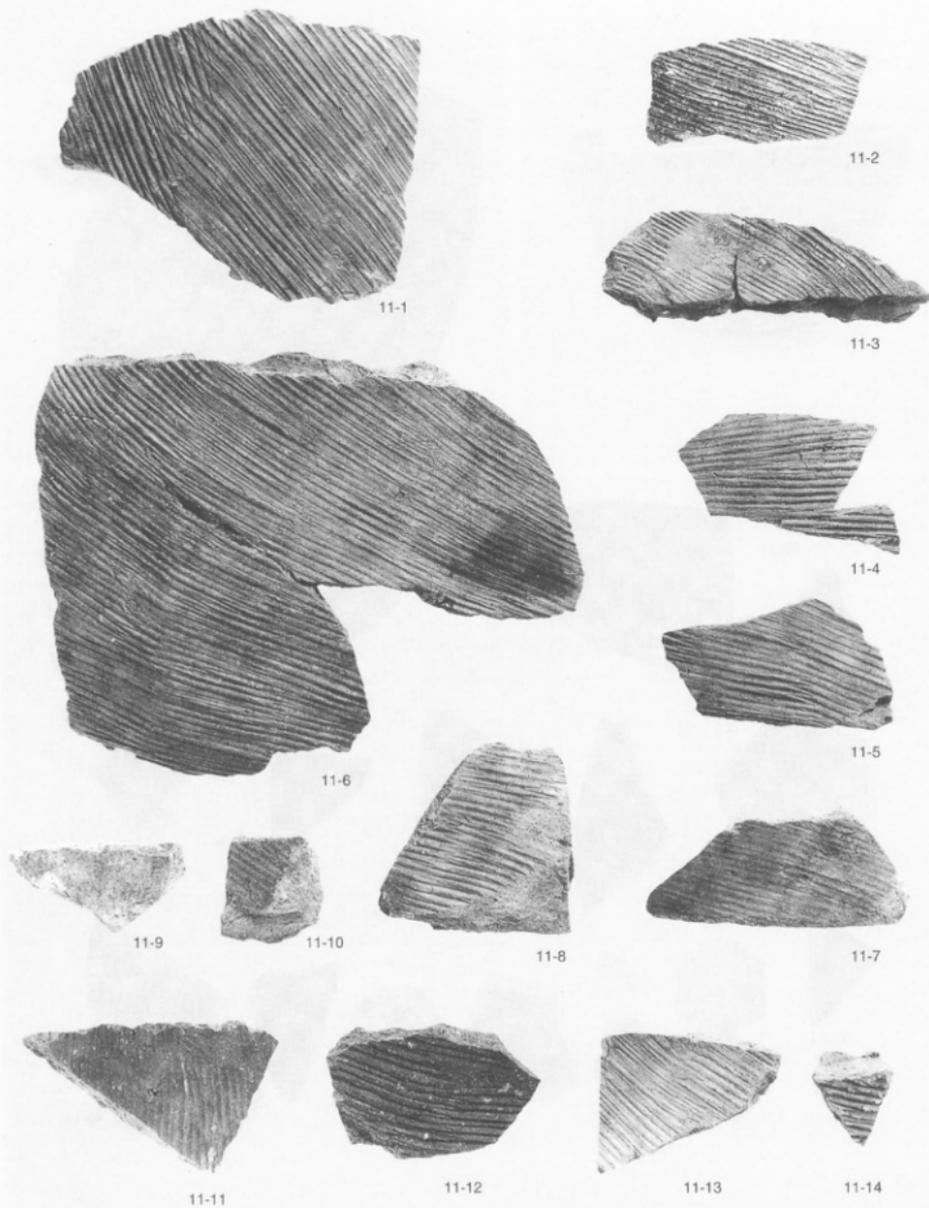


図版38 遺物写真(縮尺 1/2)

13-2号経塚・集石19・集石20・集石22・集石24・集石25・集石26・平坦面3出土(図版10参照)



图版39 遗物写真(缩尺 1/2)

集石20・集石21・集石23・集石24・集石25・集石27・集石28・平坦面3出土(图版11参照)



12-1



12-2



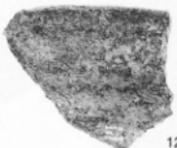
12-9



12-8



12-3



12-4



12-5



12-12



12-7



12-10



12-11



12-6



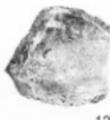
12-18



12-19



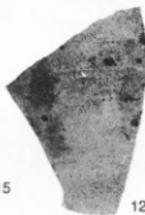
12-14



12-13



12-15



12-16

图版40 遗物写真(縮尺 1/2)

7-1号経塚・16-2号経塚・16-3号経塚・17号経塚・集石21・集石24・集石25・集石26・29号塚・  
集石30・平坦面3出土(図版12参照)

## (4) 円念寺山出土独鈷に対する自然科学的調査

株式会社京都科学 今西寿光

### はじめに

富山県中新川郡上市町円念寺山遺跡より出土した独鈷1点に対して自然科学的調査を実施した。分析は財団法人元興寺文化財研究所に依頼した。

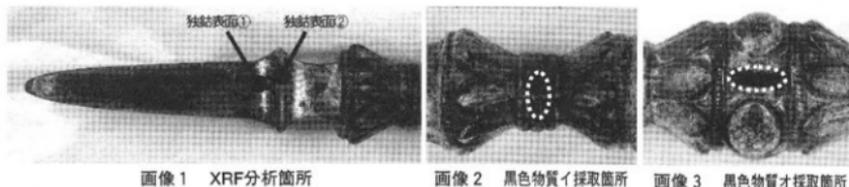
### 1. 調査の目的

独鈷の観察を行なうと、金属光沢を持つ部分に混じって黒色の部分(特に彫刻面の凹部に)存在することが認められた。黒色の部分を詳細に観察すると、黒色の部分には金属光沢のある面(今回の調査で鍍金層であることが確認された)の上位に黒色物質が付着していることが確認される。銅を主成分とする金属製品が長期間にわたって土中に埋蔵された場合、その表面を銅の化合物が覆うことは一般的にみられるが、本資料に認められる黒色物質はその外観などから銅の化合物とは判定し難いものであり、漆など有機質材料の塗布に由来する可能性も想定された。

独鈷本体の表面の状態(鍍金装飾の有無)と黒色物質の材質は密接に関連し、その材質如何では、埋蔵前の独鈷の印象が大きく変化することとなる。そのため、京都国立博物館 久保智康 工芸室長ならびに上市町教育委員会 高慶孝 副主幹のご指導に基づき、独鈷の表面状態の確認ならびに黒色物質の材質確認を実施することとした。

### 2. 調査手法

独鈷の金属光沢の残る部分と表層が脱落していた部分(以下、それぞれを独鈷表面①、独鈷表面②と記す)の2箇所を非破壊で蛍光X線分析(以下、XRFと記す)による元素分析を行った。また、黒色部の2箇所から分析用試料をごく少量採取し(以下、それぞれ黒色物質イ、オと記す)XRFによる元素分析ならびに赤外分光分析(以下、FT-IR)による材質分析を行なった。なお、黒色物質は本体に薄い厚みで付着しているのみであるため、試料採取にあたってはその表面をわずかに削り、粉状の試料を採取することとなった。画像1に分析箇所を画像2、3に分析用試料の採取箇所を示す。



### 3. 使用機器及び測定条件

#### ①エネルギー分散型ケイ光X線分析装置(セイコーインスツルメンツ製 SEA5230)

試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有のケイ光X線を検出することにより元素を同定する。

条件: モリブデン管球使用、真空条件下、コリメータ 1.8mm・0.1mm(独鈷黒色部分のみ)

管電圧45kV

②フーリエ変換型赤外分光光度計 (FT-IR) (日本電子株式会社 JIR-6000)

赤外線を試料に照射することにより得られる、分子の構造に応じた固有の周波数の吸収を解析し、化合物の種類を特定する。

条件：KBr錠剤法 (試料をKBrと混合、圧縮し錠剤を作製して行う方法)、分解能 2 cm<sup>-1</sup>、

検出器 TGS

#### 4. 結果

①独鈷本体の表面状態

XRF分析では表面①では主成分として銅 (Cu)、金 (Au)、鉛 (Pb)、また微量であるが銀 (Ag)、スズ (Sn) を検出した (図1-1)。また、表面②では主成分として銅 (Cu)、鉛 (Pb)、ヒ素 (As)、また微量であるが鉄 (Fe)、金 (Au)、銀 (Ag)、スズ (Sn)、アンチモン (Sb) を検出した (図1-2)。この結果から独鈷の表面には鍍金が施されていたことが確認された。

②黒色物質の材質

黒色物質イ、オに対してXRF分析を実施した結果、地金部とはほぼ同じスペクトルが得られた。(図1-3) 引き続き、黒色物質イ、オに対してFT-IRによる分析を行なった。その結果、両者とも無機物に由来すると思われる吸収 (1080cm<sup>-1</sup>以下低波数側の吸収) が強く現れた。これは黒色物質に独鈷に由来する錆が混在していたためと推測される。それ以外に3450、2950前後、1730付近、1400~1650cm<sup>-1</sup>に漆に由来する吸収が見られた (図2-1、図2-2、図2-3)。よって、黒色物の主成分は漆であると判断される。

〔測定条件〕

測定装置	SEA5230
測定時間 (秒)	300
有効時間 (秒)	204
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ1.8mm
励起電圧 (kV)	45
管電流 (μA)	20
コメント	

〔試料像〕



視野: (XY) 6.60 4.95 (mm)

〔スペクトル〕

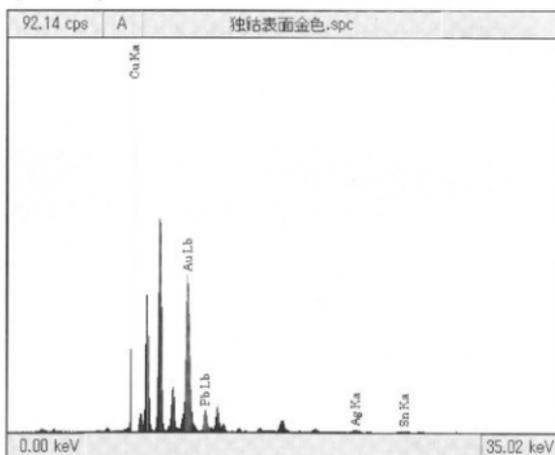
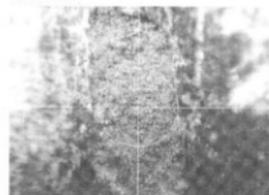


図1-1 独鈷表面①のXRFスペクトル

〔測定条件〕

測定装置	SEA5230
測定時間 (秒)	300
有効時間 (秒)	219
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ1.8mm
励起電圧 (kV)	45
管電流 (μA)	16
コメント	

〔試料像〕



視野:[XY]6.60 4.95(mm)

〔スペクトル〕

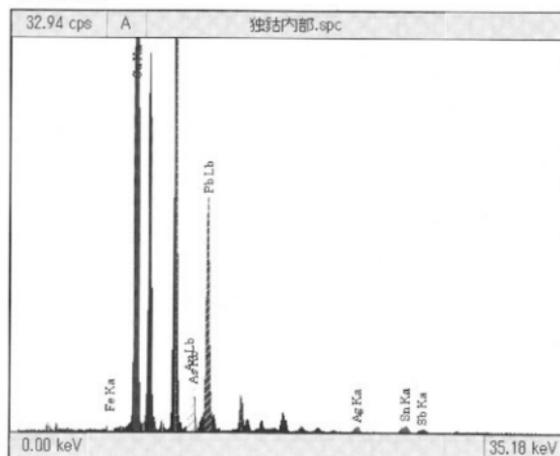


図1-2 独結表面②のXRFスペクトル

〔測定条件〕

測定装置	SEA5230
測定時間 (秒)	300
有効時間 (秒)	204
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ0.1mm
励起電圧 (kV)	45
管電流 (μA)	20
コメント	

〔試料像〕



視野:[XY]6.60 4.95(mm)

〔スペクトル〕

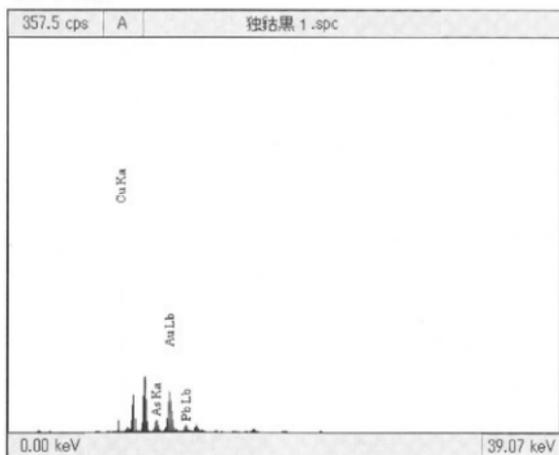


図1-3 独結黒色物質のXRFスペクトル

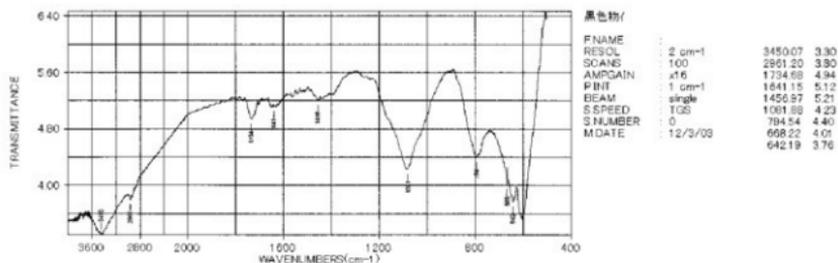


図2-1 黒色物質の赤外吸収スペクトル

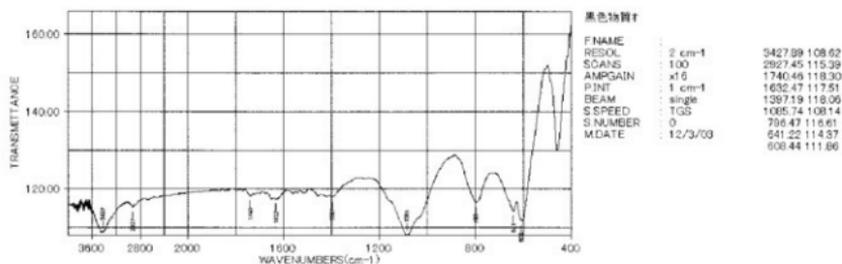


図2-2 黒色物質の赤外吸収スペクトル

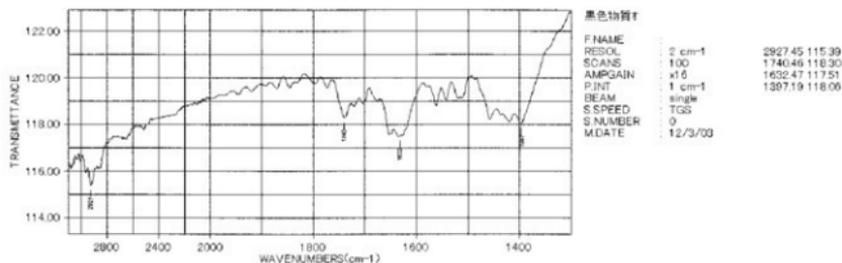


図2-3 黒色物質の赤外吸収スペクトル (図2-2の拡大)

## V 考 察

1. 遺跡の配置について (高慶 孝) .....	379
2. 円念寺山経塚出土の独鈷棒と磬について (久保智康) .....	381
3. GIS可視領域解析による廻岳・立山信仰の研究 (宇野隆夫・山口政志) .....	386
4. 黒川地区遺跡群の成立と変遷 (高慶 孝) .....	393

### 挿図・表目次

第1図 現存中世仏堂と真興寺跡の梁間・桁行 .....	380	第18図 日枝神社裏遺跡からの眺望域 (1) .....	390
第2図 事相書における密壇の記載例 .....	382	第19図 日枝神社裏遺跡からの眺望域 (2) .....	390
第3図 修善寺町寺山出土の独鈷棒 .....	382	第20図 穴の谷霊場からの眺望域 .....	390
第4図 帝釈天の三昧耶形 .....	383	第21図 黒川塚跡東遺跡からの眺望域 .....	390
第5図 独鈷形日本図 .....	383	第22図 護摩堂城からの眺望域 (1) .....	390
第6図 宮瀬出土の銅鏃形磬 .....	385	第23図 護摩堂城からの眺望域 (2) .....	390
第7図 仙宮神社境内出土の鉄磬 .....	385	第24図 千石山城からの眺望域 .....	392
第8図 廻岳山頂からの眺望域 .....	388	第25図 立山寺からの眺望域 .....	392
第9図 立山山頂からの眺望域 .....	388	第26図 白山神社 (東種) からの眺望域 .....	392
第10図 廻岳から黒川・護摩堂地区の眺望域 .....	388	第27図 西種寺院跡からの眺望域 .....	392
第11図 立山から黒川・護摩堂地区の眺望域 .....	388	第28図 黒川遺跡群遺跡別存続期間 .....	393
第12図 真興寺からの眺望域 (1) .....	388	第29図 黒川から立山への登拝ルート概念図 .....	396
第13図 真興寺からの眺望域 (2) .....	388		
第14図 黒川上山古墓群からの眺望域 (1) .....	388	第1表 黒川遺跡群と立山霊場の変遷比較 .....	395
第15図 黒川上山古墓群からの眺望域 (2) .....	388		
第16図 円念寺山からの眺望域 (1) .....	390		
第17図 円念寺山からの眺望域 (2) .....	390		

# 1. 遺跡の配置について

上市町教育委員会 高慶 孝

これまでの調査で、本遺跡群が密教に深く関わる遺跡群であることが明らかとなっているが、黒川遺跡群の遺構について景観・遺跡の配置に分けて若干の考察を行なう。

## 景観

黒川遺跡群の立地する黒川地区は北西方向に閉じた谷地形である。この谷の最深部は、立山連峰に連なる護摩堂城山である。平野部、特に中世において東大寺領墨江の庄のあった浴川から黒川方面を見れば黒川の背景に剷岳を中心とする北アルプスの山々が弊風のように立ちはだかっている。特に中心遺跡の一つである円念寺山遺跡のある舟岡山は、平野部から見ると、遺跡群の中心に突き出た尾根で、遺跡群の象徴とも見られる場所に位置する。

しかしながら、伝承真興寺跡、黒川上山古墓群、黒川塚跡東遺跡、日枝神社裏遺跡などほとんどの遺跡や平坦面は平野に対してやや隠れた位置に存在しており、山林修行に重きを置く顕密寺院の在り方を示しているものと考えられる。

## 遺跡の配置

遺跡群は、黒川上山古墓群（中世墳丘墓群）・黒川塚跡東遺跡（僧坊跡）・伝承真興寺跡（山寺）・日枝神社裏遺跡（僧坊跡）・円念寺山遺跡（経塚群）から成るが、黒川村東端で郷川は交地川・村下川に分流するがこの地点を中心に半径1km以内にこの5遺跡が集中する。遺跡の立地は山稜部分から突き出た尾根上またはその直下の谷、山腹で尾根毎にそれぞれの遺跡が配される。高野山・熊野など全国各地の霊場は、密教で言う八方蓮台の地に営まれるが、黒川はまさに蓮の花の台(うてな)に抱かれた地である。また、この5遺跡の他に護摩堂地区に至る各所に人為的な平坦面・塚状遺構などが存在する。谷全体が霊場であった時期があると考えられる。

遺跡の出現は、伝承真興寺跡（山寺）・黒川塚跡東遺跡（僧坊跡）9世紀、円念寺山遺跡・黒川上山古墓群が12世紀後半、日枝神社裏遺跡14世紀後半という順であるが、12世紀から13世紀にほとんどの遺跡が併存する。これらの遺跡は、尾根や谷を介して相互に関連した遺跡群としてとらえられる。更に谷をさかのぼると、弘法大師ゆかりの地とされる護摩堂に達する。

護摩堂には、床下に護摩壇遺構のある「弘法堂」、塚跡と平坦面が残る曲戸遺跡、僧坊跡と思われる村巻遺跡などの他、各所に塚跡が散見される。護摩堂背後の山には、中世城館の護摩堂城（箕輪城）があり、山頂からは、剷岳が眼前に現れる。この尾根は、立山連峰大日房までのびており、黒川・護摩堂両地域の宗教関連遺跡が立山信仰と結びついていた痕跡が、尾根の各所に残る。

これらの遺跡の分布から考えると、これらの遺跡群は尾根を介した回峰行の行場であった可能性が高い。

## 伝承真興寺跡の建物跡について

なお、この遺跡群のうち最も基本的な施設となるべき寺院、つまり伝承真興寺跡については、黒川地区中世宗教遺跡群保護調査委員会の委員である山岸常人氏（京都大学大学院工学研究科）より、以下のようなコメントを頂いている。

伝承真興寺跡の平坦面には、その規模と、塔跡の併存することから、一定程度の中心的な堂宇、即ち本堂が立っていたと考えられる。この堂宇の平面形式を敷地規模から推定してみる。

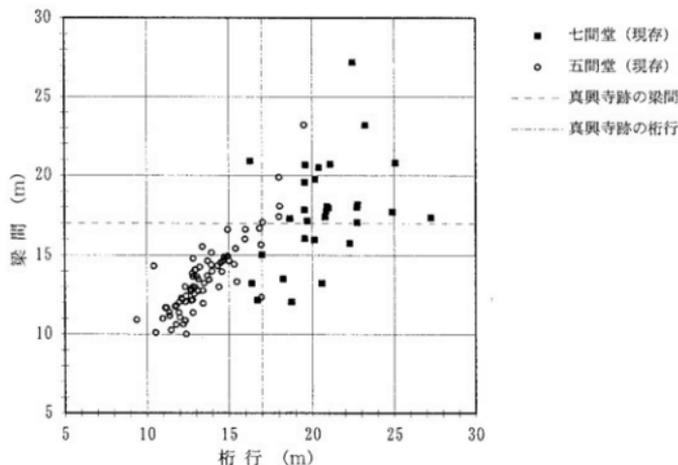
現存する中世仏堂形式の堂宇（重要文化財に指定されているもの）の桁行及び梁間を規程を明示すると第1図のようになる。この図は緑の部分を除いて、建物本体の規模を示している。伝承真興寺跡の本堂推定敷地は約18m四方であるが、緑と想定される部分を除くと17m四方程度となり、第1図と比較して、七間堂となる可

能性は極めて低く、五間堂であったと推定される。ただし、遺構中には礎が多く礎石や根石をそれと断定するのが困難であり、具体的な平面形式は確定することができない。根石状の集石、地覆状の小石の列などが見られるが、全体で整合性のある柱配置とはならない。あるいは二時期以上の遺構が重なっている可能性もある。

本章跡東南の一段高い位置にある建物は塔と考えるとよい。柱間寸法は中央1.3m弱、両脇間1m、縁束の出(側柱からの出)1.3m程度の規模に復原できる。この規模は現存の層塔の中でも小規模の部類に属し、三重塔と推定される。前山寺三重塔(長野 室町後期)が最も近い規模の現存遺構である。縁束位置から側柱にかけて遺構面が高まるので、縁の下に亀腹があったであろう。心礎の有無は判断できない。伝承真興寺跡から出土する多くの遺物が12世紀以降のものである。この時期には心礎のない塔は一般的となる。

塔の東南の高台にも礎石建物がある。明瞭な礎石だけを拾うならば間口一間、奥行二間の建物となり、春日造か一間社流造の社殿と推定される。ただし礎石の上に直接柱が立つのか、礎石の上に土台を置いて柱が立つのかは定かではない。

本章、塔、鎮守社からなる伽藍の構成は、中世の顕密寺院の一般的な形式である。



第1図 現存中世仏堂と真興寺跡の梁間・桁行

## 2. 円念寺山経塚出土の独鈷杵と磬について

京都国立博物館 久保智康

### はじめに

円念寺山と通称される尾根上に累々と石塊を組み上げて営まれた経塚は総数24基を数える。「富山県上市町黒川上古墓群発掘調査第7次調査概報」（以下「概報」と略す）では、上部を覆う集石の重なり具合から、これらは尾根先端から奥へ向かって、順次構築されていったことが推定されている。本経塚出土遺物中で最も注目すべき遺物、独鈷杵と磬は、尾根先に位置し、最も早い段階で営まれたとみられる1-1号石棚から出土した。小稿では、独鈷杵と磬の特色について述べ、これらが経塚から出土したことの意味を考察して、円念寺山経塚群、ひいては黒川遺跡群の性格づけについての一助としたい。

### （1）仏具を出土した経塚

平安時代後期に全国規模で流行した経塚は、文字通り、経典を写経し、それを塚に埋納する行為である。最も早い時期の経塚として知られる寛弘四年（1007）の藤原道長による金峯山経塚の造営は、出土した金銅経筒の銘文から、その意趣が明らかである。すなわち、まず法華経は、釈尊の恩に報い奉り、弥勒に値遇し藏王に親近して、弟子（道長自身）の無常菩提のため、次に阿彌陀経は、臨終の時に心身が散乱せず、弥陀尊を念じて極楽世界に往生せんがため、また弥勒経は、九十億劫の生死の罪を除き、無生忍（ものはすべて不生（空）であるという確信）を証して、慈尊（弥勒如来）の出世に遇せんがために、各々を書写し、埋納したという。厳密な意味での経塚の発祥は明らかでないが、この道長経筒銘によって、当該期が釈迦入滅後の末法の世に当たるという不安感から、自らの極楽往生や釈迦に代わる弥勒如来の下生に値遇することを願った作善業が経塚造営の目的と考えられている。ただし、実際に経塚が流行をみせるのはこれよりも1世紀余りのちのことで、各地で出土した経筒の銘文に見る限り、意趣の多くは自分や亡父母らの極楽往生をうたっており、院政期にピークを迎えた浄土思想を色濃く反映した宗教行為と位置づけられる。

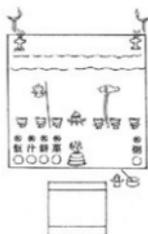
このような経塚ではあるが、独鈷杵など密教法具や梵音具の磬を出土した経塚遺跡は決して多くない。北から列記するならば、岩手県北上市上須々孫遺跡塚跡（磬）、福島県喜多方市松野千光寺経塚（独鈷杵・五鈷鈴・磬）、茨城県鹿嶋市鉢形神宮寺経塚（独鈷杵・五鈷鈴）、栃木県日光市男体山山頂遺跡（独鈷杵・三鈷杵・羯磨）、新潟県安田町横峰2号経塚（五鈷鈴・火舎）、山梨県白根町善応寺経塚（磬）、愛知県鳳来町鏡岩下遺跡（五鈷杵・六器）、石川県白峰村白山山頂遺跡（独鈷杵）、京都府綾部市木寺北遺跡（鉄磬）、同京都市花背別所6号経塚（独鈷杵・五鈷杵）、同鞍馬寺経塚（独鈷杵・三鈷杵）、兵庫県神戸市滝ノ奥経塚（独鈷杵）、奈良県天川村金峯山経塚（独鈷杵・三鈷杵・六器・磬）、和歌山県勝浦町那智経塚（宝珠杵・独鈷鈴・三鈷鈴・五鈷鈴・羯磨・四檀・六器・火舎）、岡山県金光町上竹経塚（三鈷杵・五鈷杵・六器・飲食器）など15遺跡を挙げると過ぎず<sup>(1)</sup>、数百に及ぶ経塚遺跡数からみれば、きわめて特殊な例に当たるのである。

### （2）壇具としての密教法具

これら経塚出土の密教法具のうち、複数種がまとめて出土している場合は、埋納の際の法儀のために現場にしつらえられた壇具であった可能性が考えられる。最も典型的な例は那智経塚である。那智滝を御神体とする飛瀧権現の参道付近から、大正七年に多数の法具が仏像などとともに出土した。これらは、「那智山龍本金経門縁起」に記すところの、沙門行誉が大治五年（1130）に執り行った埋納供養のうち、金剛界三十七尊の立体曼荼羅の八供養具に当たるとされる法具類で、同縁起に列挙する53点のうち約3分の2が発見遺物に該当する<sup>(2)</sup>。文末に「如法経供養日具相具可奉納」とあって、如法に書写した経典を供養する際に、実際に修法を行ったらしい。法具類は、大壇具として火舎・六器・花瓶が前後左右の各面に並ぶ四面器を構成している。火舎で香を焚き、六器にも香や花房を供献して、諸仏へ

の供養を行った。

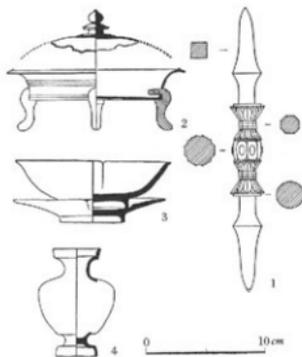
このような密教の大規模な壇具ではなくとも、経塚に写経を埋納するにあたっては、何らかの壇具をしつらえる必要があった。天台宗青蓮院門跡が天永から応永年間（1110～1427）の約300年にわたり執行した修法記録『門業記』（『大正新修大藏經 図像部』第11巻）には、如法経の詳細な次第が記されている。写経の後に十種供養と称する法儀が執り行われ、花・香・<sup>くさくさ</sup>璎珞・<sup>まゆ</sup>抹香・<sup>ぼく</sup>檀香・<sup>くわん</sup>幡蓋・衣服・<sup>あそび</sup>妓楽・<sup>あし</sup>合掌という十種の供養具が奉じられた。記録では仏堂内で行われた場合が多いが、寺院から離れた経塚では現場で行われたことも多かったであろう。そしていよいよ写経を筒に入れ地中に埋納する際にも、法儀が行われた。『門業記』によれば、これらの法儀は四智讃や伽陀などの<sup>しやうめい</sup>声明に<sup>くわん</sup>鐘・<sup>くわん</sup>鼓を奏するという密教形式により進行了。したがって、導師の前には最低でも一面器（火舎の手前に金剛盤と独結杵・三結杵・五結杵の組法具が置かれ、左右に六器、<sup>あか</sup>飲食器、<sup>はな</sup>花瓶が対称に配置される）を備えた密壇が設置されたはずである。例えば第2図は、鎌倉時代に著された天台密教の事相書『阿婆持抄』第三十七、「十八道次第」（『大正新修大藏經 図像部』第8巻）の冒頭に記す密壇で、手前中央に五鈴杵を省略して描くのみであるが、実際には金剛盤上に置かれ、独結杵をはじめとする金剛杵も常置された。法儀が終了した後、道具類はすべて撤収されることが多かったらしいが、ときに供養のため現場に残置される場合があったのではないか。金峯山経塚や那智経塚、鞍馬山経塚などは、このような状況を想定すると説明がしやすい。



第2図 事相書における密壇の記載例

### (3) 円念寺山独結杵の特色

このことを考察するのに先立って、独結杵そのものの特色を確認しておかねばならない（法量などの詳細は『概報』および本報告書に述べられているので繰り返さない）。形態上の特色として、以下の4点が挙げられる。①中央の<sup>まなこ</sup>鬼目の径が大きく、突出度も大きい。②<sup>くわん</sup>蓮弁は素弁で先端が尖る。③蓮葩を約する三条紐帯の断面が八角形を呈する。④結先が尖り、側面がわずかに匙面となる。これらはいずれも、平安時代から鎌倉時代に至る独結杵の型式変化に照らすと、ひじょうに古様な特色である。例えば、静岡県修善寺町寺山から出土し、緑釉陶器の輪花碗・托を伴出して平安時代前期まで遡る公算の大きい独結杵（第3図）<sup>1)</sup>は、円念寺山独結杵の先駆的形態として了解されよう。また前述の各経塚から出土した独結杵と比べても古式に属し、製作が11世紀まで遡る可能性は十分ある。円念寺山経塚の遺物群をみると、造営の年代幅



第3図 修善寺町寺山出土の独結杵 (望月1964)

は12世紀半ばから末までの約半世紀に絞られ、独鈷杵はそれよりも相当遅ることになる。

この点に関係するのが、独鈷杵の表面を覆う黒色塗膜である。保存処理に際しての成分分析によれば、本体は銅と鉛を主成分とする青銅合金で、表面に鍍金を施した金銅製品であることが判っている。また黒色塗膜は、漆成分である可能性が高いという。ちなみに、平安後期から鎌倉時代にかけて製作され今日まで伝世した金銅仏具にもしばしば同様の黒色塗膜を認め、これは表面の防錆を目的としたものとも、表面鍍金の安定化を図ったものともいわれる<sup>(4)</sup>。すなわち本品も、経塚へ埋納するために製作されたものではなく、半世紀以上の間、しかるべき寺院で使用されていた法具とみなされるのである。

#### (4) 独鈷杵のシンボリズム

そもそも独鈷杵とは、いかなる法具であろうか。先を尖らす鈷部が1本のもを独鈷杵、鈷が3本のもを三鈷杵、5本のもを五鈷杵と呼び、さらに先が宝珠や宝塔をかたどったものをそれぞれ宝珠杵、宝塔杵という。これらはまた金剛杵と総称される。金剛杵はサンスクリットでVajraといい、跋折羅、または縛日羅と音写される。その形は古代インドの武器に由来し、古式の遺品や密教図像、曼荼羅に描かれる金剛杵は、いずれも鈷先を鋭く尖らせる。密教修法においては、行を妨げるものを摧破する行者護身の具、あるいは心中の煩惱を打破し本来の仏性を呼び起こすための具とされ、行中は常にこれを携える。

独鈷杵、三鈷杵、五鈷杵は、それぞれ鈷の数に応じた意味をもつ。三鈷杵は、仏部・蓮華部・金剛部の三部、あるいは身・語・意の三密を表し、五鈷杵は五智・五仏を表すという。対して独鈷杵は、独一法界、精進・勇猛、摧破の儀を表すという。独一法界とは、全宇宙で唯一の真理、すなわち大日如来を象徴し、鬼目は大日の眼ともいわれる。また精進・勇猛とは、菩提心、悟りに向かって精進修行すること、その強い意志を示し、摧破とはいうまでもなく煩惱を打ち砕くことである。

また曼荼羅中においては、三昧耶形といい、個別の仏を象徴するかたちとして法具が描かれる。独鈷杵は、例えば金剛界曼荼羅の賢劫十六尊中の大精進菩薩、同じく十二天中の帝釈天、胎藏界曼荼羅の発生金剛部菩薩、住無載論菩薩などの三昧耶形である(第4図)。

以上の純然たる密教テキストにもとづく意義づけのほか、とくに独鈷杵に関するシンボリズムは、中世日本でいっそうの捻がりをみせた。例えば、天皇家で継承される神霊の箱の中身は、中世において天皇自身ですら見ることができず、さまざまな説がとりざたされたが、真言密教では、「神璽ト者、其鉢日本国大八六十四天ノ嶋トツ嶋繞因也。(中略)類教ニハ法華経巻軸ト習也。密宗ニハ独古ノ鉢ト習也。天ノトホコ是也。ホノ字ヲ略シテ独古ト云也。」(仁和寺蔵『三種神器口決大事』)とあるように、神璽を日本国図であるとした上で、これを密教では独鈷の形をしていると捉えていた。天台宗においても、比叡山の記家(山門の記録を職掌とした学僧)であった光宗(1276~1350)が後半生をかけ撰述した『漢嵐拾葉集』に、「問。我が國を以て独古の形に習方如何。答。行基菩薩の記に云。日本は其れ独古と云へり。」とあり、すでに行基の時代から日本を独古形と見る言説があったと伝えている。さらに同箇所には独鈷形の日本國が描かれ(第5図)、「口伝に云ふ、伊勢と湖海と北海と三所は、独鈷の鬼目なり。伊勢は宝部の神明なるが故に、如意宝珠をもって神体となす。氣比は北方の事業の神明な



第4図 帝釈天の三昧耶形  
〔金剛界九會曼荼羅(三昧耶形)〕  
〔大正新修大藏經 因縁部 第1巻所収〕



第5図 独鈷形日本國  
〔『漢嵐拾葉集』巻第六〕  
〔大正新修大藏經 第76巻所収〕

るが故に、羯磨をもって神明体となすなり。山王は不二の中道の神明なるが故に、円満月輪をもって体となす。」と記す<sup>55</sup>。つまり、日本の中枢の神仏である伊勢神明と教賀氣比、そして比叡山麓の日吉山王の三所が、独結杵の要である鬼目に通じる、という考え方である。

黒田日出男氏は、先の『浪風拾葉集』の記述に加え、いくつかの史料を提示し、独結のイメージの連鎖について論じ、次の3点に集約している。(1)独結は聖なる〈かたち〉であり、〈日本国〉も〈日本〉も独結の〈かたち〉をしているがゆえに聖なる〈国土〉なのであった。(2)神話のなかで伊弉諾・伊弉冉の阿神が海をかきまぜて〈国土〉を生み出したときに使われた聖なるモノである天璽才=天遣才も、その〈かたち〉は独結であって同体であった。(3)聖なるトコロつまり〈日本〉の海底にあるとされる大日如来の印文パンと呼ばれるしるしも同じく独結なのだった<sup>56</sup>。取り上げられた史料はいずれも中世のもので、これがそのまま11~12世紀の宗教思想に当てはまるか慎重に検討する必要はあろう。とはいえ、少なくとも(1)と(2)は行基菩薩の言説といわれ、行基が平安時代初期に成立した『日本霊異記』においてすでに菩薩としての靈験譚を載せることから推して、上記の独結イメージが中世以前に成立していた可能性は少なくないと思われる。

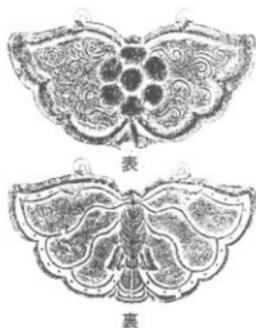
#### (5) 独結杵納置の意図~磬との関係から~

前節で述べた独結杵のシンボリズムを考慮すると、円念寺山経塚の造営に先立ち、発願者あるいは勧進僧といった1-1号石標に独結杵を納置した造営主体者(発願者あるいは勧進僧)の意図について、いくつかの可能性を想定できる。第一には、武器に由来する煩惱破壊の意から転じ、経塚ひいては埋納されるべき經典の護持、という意図である。第二には、大日如来の象徴たる独結杵を地下に埋納することで、大日による経塚の加護を願ったことも考えられよう。第三には、日本国そのものを独結杵とみる観念、あるいは海をかきまぜ大地を生み出した鐘を独結杵と同体とみる観念から、経塚を営もうとする円念寺山なる場そのものの聖性を示そうとした、という考え方もできるかも知れない。

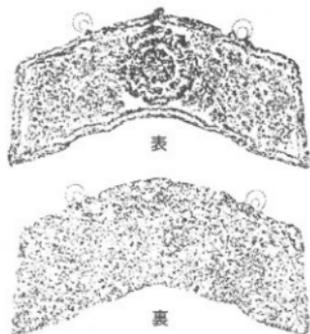
しかしこのように独結杵納置の意図を想定したとしても、同時に埋置された磬との関わりが、問題としてなお残っている。円念寺山磬は、形状こそ身幅狭く横長の平安時代的な形制であるが、蓮華形の撞座を鑄出す以外に文様を表さず、それも片面のみ、という特色をみせる。撞座は、蓮弁が素弁十四弁、蓮子が1+9と異例の構成で(通例では八弁、1+8などの構成となる)、円形蓮肉を表さず、肉取りもごく薄いなど、形式化が進んだ作例との見方もありえよう。しかし、平安時代の作例として知られる長野県松本市宮瀧出土の蝶形磬(東京国立博物館蔵)が、1+6の円形蓮肉をもたない大粒蓮子を片面のみを表して撞座とし、しかも両面の意匠を運る自由な意匠性をみせている(第6図)<sup>57</sup>。この撞座は、伴出した鋸口の撞座とまったく同様で、しかもこちらに長保三年(1001)の年紀を刻むことから、11世紀に遡る撞座意匠であることがわかる。前にふれた北上市上須々孫遺跡出土の鉄製山形磬も、宮瀧磬に近似した撞座をもつ片面磬である。さらに円念寺山磬と最も近い形状をもつ三重県南島町仙宮神社境内出土の鉄製山形磬も片面磬である(第7図)<sup>58</sup>。以上の事例をみれば、円念寺山磬は平安時代後期の磬の特色をひじょうによく示しているといえることができる。

磬はいまでもなく、説経の前後に、導師が合図として打ち鳴らす梵音具で、密教法具の独結杵とはまったく性格を異にするものである。古代・中世文学の中でも、磬に独結杵のようなシンボリズムをうかがわせるような記述は管見にない。前にもふれた『門業記』の如法経の記録においても、写経に当たっての道場荘厳で磬台がしつらえられ、法会で磬が打たれたが、鏡・鏡を用いる密教形式の法儀が進められた埋経現場では、釈迦や弥勒の仏名を繰り返して唱える合衆と、埋経の眞誦文を曲譜を以って唱える伽陀が短く行われたくらいで、磬は用いられなかったようである。さすれば、円念寺山磬も独結杵と同様に、2節で検討したごとく壺具や法具とみるのは難しく、当面のところは埋経に際しての奉養品と考えるのが妥当とも思われる。

ただ、ここで想像をたくましくして、次のような可能性も提示しておきたい。独結柱と轡がほとんど接するように検出されたという状況にかんがみると、もとは轡の上に独結柱が置かれたのではあるまいか。すなわち、轡は金剛杵を安ずべき金剛盤に見立てられた、ということになる。さらに独結柱のシンボリズムを念頭におくと、蓮台に独結柱を立てた形の三昧耶形であったことも考えられなくはない。もっとも、轡は裏を上に向けた状態で検出されており、蓮座を蓮台とみなしたとすれば、つじつまがやや合にくい。



第6図 宮淵出土の銅蝶形磬 (広瀬1943)



第7図 仙宮神社境内出土の鉄磬 (広瀬1943)

いずれにしても、1-1号石塚の意義は、相当期間、実際の密教修法に用いられた貴重な独結柱を、あえて地中に埋置するという、経塚造営主体者の強い意志を表しているということに尽きる。経筒外容器（もしくは経容器そのもの）として在地産の珠淵焼を多用する、という点を除けば、銅鏡や鉄製利器、中国陶磁などを写経と一緒に埋納した円念寺山経塚のあり方は、石材の使用や塚の構築法も含め、畿内の経塚とほとんど違いがなく、勧進僧もしくは発願者が畿内の経塚造営の習いを熟知していたのは確実である。また、勧進僧が属したであろう黒川遺跡群内の寺院が、天台宗もしくは真言宗の畿内権門寺院とも直結した顕密寺院であったことを如実に物語る。そしてそのことが、古代に創建された黒川の山林寺院が、12世紀という重要画期を経て中世寺院としてさらなる拡大発展をみることの直接的な背景理由であったとも考えられるのである。この点で、北陸西南部、越前・南加賀の古代山林寺院が、12-13世紀ごろに、白山を開いた泰澄の開基譚をもち、白山三所権現（十一面観音、阿彌陀如来、聖観音）を奉じて、白山信仰の寺となり、延暦寺や遠隔地にまで勧請された白山神社などにもつながるより広域のネットワークを形成するに至ったこと<sup>8)</sup>、まったく同時代的な動きのただ中に黒川地区もあったということができようか。

#### 注

- (1) 上頭々孫造跡(未報告)以外は、立正大学考古学会『考古学論叢 第5号 岩倉出土仏具の世界』1999年の集成によった。
- (2) 東京国立博物館編『那智山経塚遺存』東京美術 1985年
- (3) 柴月葉弘『伊豆修善寺町の仏教遺物』(修善寺町史料第3集) 修善寺町教育委員会 1964年
- (4) 東京文化財研究所の加藤寛氏のご指示によると、このような塗絵顔は本来透明な透漆であった可能性が高く、経年で黒色を帯びるに至ったものらしい。
- (5) 田中實『『溪嵐拾遺集』の世界』名古屋大学出版会 2003年  
黒田日出男『熊の棲む日本』(岩波新書831) 岩波書店 2003年
- (6) 黒田前掲書、37頁
- (7) 広瀬都賀『日本銅鏡の研究』清園舎 1943年
- (8) 久保智康「北陸の山岳寺院」『北陸の山岳寺院(Ⅱ)』『考古学ジャーナル』382・426 1994・1998年

### 3. GIS可視領域解析による劔岳・立山信仰の研究

国際日本文化研究センター 宇野隆夫・中央大学大学院博士課程 山口欧志

#### はじめに

劔岳・立山信仰は、標高3,000m級の雪峰を中心として発展した雄大な山岳宗教であり、山頂部から山麓部にかけて古代から近代に至る数多くの山岳宗教遺跡が展開している。これらの遺跡の意義は、一つ一つの遺跡の着実な調査によって解明されつつあるが、山岳宗教遺跡の現地を歩く時、その眺望が非常に重要であることを実感する。

このことを検証するために、国土地理院提供の50mメッシュ数値地図とGIS（地理情報システム）の眺望分析機能を使って、主要な地点からの眺望域を復元し、山岳宗教遺跡研究法の一つを提示することとした。

なお遺跡データは富山県上市町教育委員会から提供を受け、離波純子が国土地理院地形図閲覧システムを用いて、遺跡代表点の世界測地系緯度・経度を取得した。なおここで示す眺望域は、当該地点の標高に、ほぼ人の目線の高さである1.5mを加えた地点からのものである。高い建物を建てると異なる眺望が得られるが、ここで示す眺望はおおよそ山岳宗教者が当該地点に施設を設けると判断した時点（おそらくは草木が繁らず空気が澄んだ冬期の晴天日）の眺望として提示している。

#### (1) 劔岳・立山山頂からの眺望

劔岳山頂（標高2,999m）からの眺望は、越中国（富山県）新川郡の平野部に広く広まり、その各地区から劔岳山頂を遠拝することができたと考えられる（第8図）。

この眺望と山岳宗教遺跡の立地との関係を見ると、山麓部では上市町黒川・護摩堂地区のかなりが劔岳の眺望域に入り、千石城跡、大黒山、大日岳、奥大日岳など劔岳山頂への登山ルートが想定される要所も良好な眺望域に入っている。

さらには別の劔岳登山ルートが推定される立山寺、白山神社（東種）も眺望域の中にあり、大岩日石寺、大岩京ヶ峰塚域付近にもわずかであるが眺望域がある。これらのルートに続く、西種寺跡、高峰山、大江山も、劔岳山頂からの眺望が良好である。

また劔岳山頂から南にかけては、別山、立山山頂雄山神社、玉堂岩屋社を眺望できるが、立山町域からの立山登山ルートである芦崎寺雄山神社、米拝山、立山室堂は劔岳の眺望域から外れている。

立山山頂（標高3,003m、雄山神社）からの眺望域も広大であるが、劔岳とは異なって新川郡の平野北部に眺望できない地域が存在する（第9図）。さらには一部を除いて、上市町域から劔岳山頂に至るルート上の山岳宗教遺跡のかなりが、立山山頂からの眺望域から外れていた。他方、立山山頂からは劔岳、別山、大日岳、奥大日岳がよく見えて、芦崎寺雄山神社、米拝山、大江山、室堂平という立山町域からの登山ルート上の主要なポイントも立山山頂からの良好な眺望域の中にある。

このように劔岳と立山は大きく見て、山頂部地域については眺望を共有する一方、山麓部地域を中心とする登山ルート上の山岳宗教遺跡の眺望は排他的な関係にあったと言える。ただしこれはおおよその傾向であり、徹視的には以下で述べるように眺望域は複雑に入り組み、個々の遺跡からの眺望は多様であった。

黒川・護摩堂地区に限って劔岳山頂からの眺望域を見ると、真興寺、日枝神社裏遺跡、黒川上山古墓群、円念寺山経塚群、護摩堂寺院跡、護摩堂城など、主要な遺跡が劔岳山頂の眺望域に存在する（第10図）。他方、護摩堂曲戸遺跡・村巻遺跡・弘法堂・行場、黒川岸天遺跡、寺院・墓地（中央）、穴の谷壺場、黒川塚跡東遺跡などが劔岳の眺望域から外れている。

また黒川・護摩堂地区には立山山頂からの一定の眺望域があり、真興寺、黒川上山古墓群、護摩堂寺院跡、護摩堂城、平坦地1・2・3から、立山山頂を眺望することができた(第11図)。なお黒川・護摩堂地区の山岳宗教遺跡群の盛衰を考える上で重要な意義をもつ千石城跡は、鯉岳を眺望できて立山は眺望できない位置にある。

以上から、黒川・護摩堂地区の山岳宗教遺跡群を、鯉岳山頂と立山山頂に対する眺望から、以下の3群に大別できるであろう。

- 1群(鯉岳山頂と立山山頂の両方を眺望できる)：真興寺、黒川上山古墓群、護摩堂寺院跡、護摩堂城、平坦地1・2・3。
- 2群(鯉岳山頂を眺望できて立山山頂を眺望できない)：日枝神社裏遺跡、円念寺山経塚群、平坦地5・7・8・9。
- 3群(鯉岳山頂と立山山頂の両方を眺望できない)：護摩堂曲戸遺跡・村巻遺跡・弘法堂・行場、黒川岸天遺跡、寺院跡・墓地(中央)、黒川塚跡東遺跡、穴の谷壺場、平坦地13・15・17・18・21。

## (2) 黒川・護摩堂地区遺跡群からの眺望

上で述べたことさらに留意しながら、黒川・護摩堂地区の各遺跡からの眺望を検討することとしたい。

[1] 真興寺(第12・13図) 真興寺は東密小高流の開祖である真興僧都が開基したとする伝承をもつ本格的な伽藍をもつ山麓寺院であり、鯉岳山頂と立山山頂を眺望できる地点にある。

真興寺からの黒川・護摩堂地区遺跡群の眺望は、非常に良好である(第12図)。特に護摩堂曲戸遺跡、護摩堂村巻遺跡、弘法堂、行場、黒川岸天遺跡、寺院跡・墓地(中央)、平坦地15・17・21という、鯉岳山頂と立山山頂の両方を眺望できない遺跡・平坦地の多くを眺望できたことが注目される。護摩堂地区の遺跡群については、寺院跡(護摩堂南)を除いてすべての遺跡を真興寺から眺望できたことは、真興僧都が護摩堂地区を訪れたとする伝承が存在することを想起させるものである。

黒川・護摩堂地区には鯉岳山頂・立山山頂を眺望できない遺跡・平坦地が少なからず存在するが、このようにその多くが真興寺を介して眺望が連鎖していた。鯉岳・立山山頂からの眺望が悪い地区にも巧みに施設を配することによって、真興寺のような中核山麓寺院を介して眺望の連鎖域を形成していた可能性を考えておきたい。

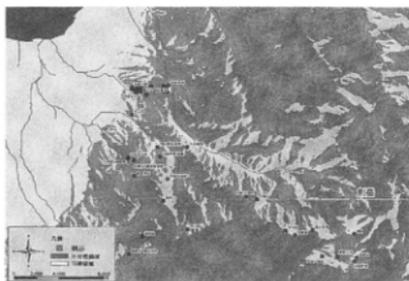
この真興寺からも見えない遺跡は、日枝神社裏遺跡、黒川上山古墓群、黒川塚跡東遺跡、穴の谷壺場とその周辺の平坦地などであるが、日枝神社裏遺跡、黒川上山古墓群は山頂への独自の眺望をもち、黒川塚東遺跡は護摩堂城から眺望できる。従って、穴の谷壺場とその周辺の平坦地のみが、黒川・護摩堂地区にあって特に閉鎖的な眺望域の中にあつたといえる。

他方、平野への眺望は良好であるが、一望できるというほどではない(第13図)。真興寺は平野部を広く眺望することよりも、正しく西方に向かうことを重視していたように思われる。

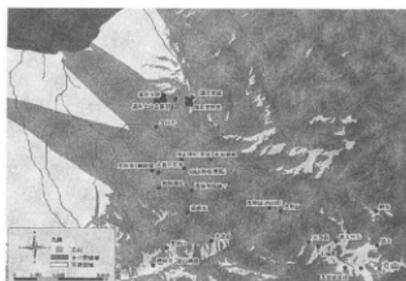
[2] 黒川上山古墓群(第14・15図) 黒川上山古墓群は、鯉岳山頂・立山山頂を眺望できる地にある中世前期の大火葬墓地であり、その被葬者がどのような人々であるかは当地域の宗教活動を考える上で重要な意義をもっている。

黒川上山古墓群からの黒川地区の眺望を復元すると、ほぼ同時期に成立した円念寺山経塚群とその周辺の平坦地が見えるほかは眺望が悪く、何よりも真興寺からの眺望がきかないことが注意される(第14図)。これに対して、護摩堂地区の眺望域をみると、護摩堂村巻、行場、護摩堂城、平坦地21などを眺望でき、弘法堂も建物が見えたと推定できる。眺望からは、黒川上山古墓群は真興寺よりも護摩堂地区との関わりが深いと言えるであろう。

黒川上山古墓群からさらに広域の眺望を復元すると、鯉岳登山ルートにそって一定の眺望域があるが遺跡と重なることはほとんどない。その反面、大江山、大熊山、大日岳、大汝山の眺望は良好であり、鯉岳・立山山頂も眺望できた。また平野の眺望域は非常に狭い反面、正しく西方を向くことに、宗教的な意図が存在した可能性が高いであろう。



第8図 鶴岳山頂からの眺望域



第9図 立山山頂からの眺望域



第10図 鶴岳から黒川・護摩堂地区の眺望域



第11図 立山から黒川・護摩堂地区の眺望域



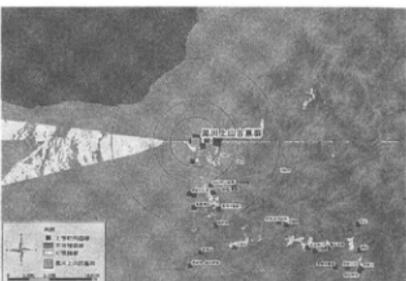
第12図 真興寺からの眺望域 (1)



第13図 真興寺からの眺望域 (2)



第14図 黒川上山古墓群からの眺望域 (1)



第15図 黒川上山古墓群からの眺望域 (2)

(第15図)。

このように黒川上山古墓群は、護摩堂地区、雲峰、西方（おそらくは浄土）の眺望を意識した、墓地にふさわしい立地であったと推定する。

[3] 円念寺山経塚群(第16・17図) 円念寺山経塚群は、丘陵上に連続して築いた中世前期の大経塚群であり、当時の第一級の密教法具ほかを埋納したものである。

黒川・護摩堂地区の眺望としては、真興寺、日枝神社裏遺跡、黒川上山古墓群、平坦地1・2・5を眺望できるが、その他の遺跡の眺望は悪く、特に護摩堂地区の遺跡はすべて見えない(第16図)。

円念寺山経塚群からの広域の眺望は、大江山、大日岳、鰐岳の眺望が良好であるが鰐岳登山ルート上の遺跡は見えず、平野部に関しては西北の方向に、黒川上山古墓群と同様の狭い眺望域がある(第17図)。

他の遺跡と平野の眺望が限られていて、雲峰の眺望が良いことは、黒川上山古墓群と共通するが、黒川上山古墓群が護摩堂地区の遺跡を眺望できるのに対して、円念寺山経塚群は真興寺を眺望できることが相違点である。

[4] 日枝神社裏遺跡(第18・19図) 日枝神社裏遺跡は、現在の日枝神社に近接し、分布調査採集資料からみて、出現が古代に遡る可能性が高いものである。鰐岳山頂をわずかに眺望できるが立山山頂は眺望できない位置にある。

日枝神社裏遺跡からは黒川・護摩堂地区の眺望は、黒川岸天遺跡、円念寺山経塚群、護摩堂城・行場・平坦地21とその周辺の平坦地が見えるが、真興寺、黒川上山古墓群は見えない(第18図)。日枝神社裏遺跡の眺望は、護摩堂地区との関わりが深いと言えるであろう。

広域の眺望を見ると、日枝神社裏遺跡からは平野部の見通しが悪い反面、鰐岳に加えて、大江山、大日岳、奥大日岳の眺望は良好であった(第19図)。

日枝神社裏遺跡からは鰐岳をはじめとする雲峰が眺望できる反面、立山山頂、真興寺、黒川上山古墓群は見えず、平野の眺望も良くないという特色をもつ。

[5] 黒川岸天遺跡 黒川岸天遺跡からは、真興寺、日枝神社裏遺跡、黒川塚東遺跡、平坦地1・9・15・17などを眺望できるが、護摩堂地区のすべての遺跡をはじめとして見えない遺跡・平坦地が多い。広域の眺望でも、大江山がわずかに見えるほかは、雲峰も登山ルート上の遺跡もほとんど眺望できない位置にある。ただし平野部の眺望は西に向けて開けていて、真興寺あるいは日枝神社裏遺跡と関わるものと推定できる。

[6] 穴の谷霊場(第20図) 穴の谷霊場は、空海が杖を用いて発見したと伝える湧泉であり、現在も霊水を求めて多くの人々が訪れている。

穴の谷霊場は、周辺の平坦地1・3・13を除くと、眺望できる遺跡が存在しない(第20図)。しいて他との眺望との関係を求めるなら、護摩堂城から平坦地1・3が眺望できるが、真興寺からは穴の谷霊場周辺の平坦地すら眺望できない。広域の眺望をみても、穴の谷霊場は、雲峰も平野もほとんど見ることができない位置に存在している。

このように穴の谷霊場は、黒川・護摩堂地区において眺望が最も閉鎖的な空間に存在したものであり、それが湧水という自然条件によるか否かが検討課題と思われる。

[7] 黒川塚跡東遺跡(第21図) 黒川塚跡東遺跡は、寺院と推定できる平坦面・礎石と塚があり、古代に成立したものである。

黒川塚跡東遺跡の眺望は、護摩堂城、黒川岸天遺跡を眺望できるが、その他のほとんどの遺跡を眺望できない。また平野や雲峰の見通しも悪い。

[8] 寺院跡・墓地(中央) 寺院跡・墓地(中央)は、真興寺、日枝神社裏遺跡、円念寺山経塚群から眺望できるが、護摩堂地区をはじめとして、その他の遺跡からの眺望は悪い。平野と雲峰の見通しもあまりきかない位置にある。



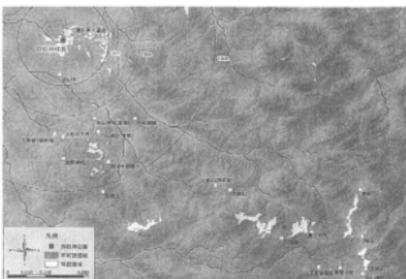
第16図 円念寺山からの眺望域 (1)



第17図 円念寺山からの眺望域 (2)



第18図 日枝神社裏遺跡からの眺望域 (1)



第19図 日枝神社裏遺跡からの眺望域 (2)



第20図 穴の谷霊場からの眺望域



第21図 黒川塚跡東遺跡からの眺望域



第22図 護摩堂城からの眺望域 (1)



第23図 護摩堂城からの眺望域 (2)

[9] 護摩堂城(第22・23図) 護摩堂地区は空海ゆかりの地と伝承されるが、その中に武家の中世山城と推定できる護摩堂城が最高所に位置している。ここからは観岳・立山山頂を眺望できるとともに、この地域の遺跡群の中では最高所に立地している。

護摩堂城からの他の遺跡群の眺望については、黒川・護摩堂地区の主要遺跡のかなりを眺望できるが、黒川岸天遺跡、寺院・墓地(中央)、穴の谷雲場、平坦地5・8・10・13などは眺望できない(第22図)。

そして広域の眺望城を復元すると、護摩堂城は越中国新川郡の平野部を広く眺望できる位置にあった(第23図)。この点が他の密教系山岳宗教遺跡と性質を異にするところと思われる。

### (3) 黒川・護摩堂地区周辺の遺跡からの眺望

上市町内には、黒川・護摩堂地区以外にも多数の重要な山岳宗教遺跡が存在するが、ここではその中から若干の遺跡をとり上げて眺望を検討し、黒川・護摩堂地区遺跡群との比較材料としたい。

[1] 千石城跡(第24図) 千石城跡は、東国から入部した在地領主土肥氏が中世後期に築いた可能性が高い山城である。観岳山頂と黒川・護摩堂地区の遺跡群の間に立地し、観岳信仰を変質させたと推定される遺跡である。

千石城跡からは護摩堂城と真興寺を眺望できるだけでなく、白山神社(東種)、西種寺院跡、高峰山、大辻山、大熊山、大日岳、奥大日岳、観岳という各登山ルートの主要ポイントを良好に眺望できて、平野の眺望域も非常に広大である(第24図)。平野の眺望の広さに加えて、千石城跡から黒川・護摩堂地区だけではなく、他の観岳登山ルート上の山岳宗教遺跡も眺望できることは、重要なことと思われる。他方、芦峠寺雄山神社から室堂平・立山山頂に至る立山関係の遺跡はほとんど見ることができない。

このように千石城跡は、観岳信仰に強い影響を及ぼしうる位置にあり、その出現と観岳山岳宗教遺跡の盛衰との関係の解明は、山岳宗教の推移を考える上で重要な意味をもつと推定できる。

[2] 立山寺(第25図) 眼目山立山寺は、曹洞宗総持寺の大微宗令禪師が開基し、在地領主の土肥氏と深く関わった禪宗寺院である。

その眺望の特徴は、黒川・護摩堂地区をはじめとして、密教系山岳宗教遺跡のほとんどが見えない位置にあることである(第25図)。他方、大辻山、大熊山、大日岳、奥大日岳、観岳の眺望は良く、平野部の眺望域は広大であり、独特の位置を占めている。

[3] 白山神社(東種)(第26図) 白山神社(東種)は、観岳登山ルート上の遺跡と推定できるものである。白山神社(東種)からの観岳の眺望は良好であるが、他の山岳宗教遺跡と平野はほとんど眺望できない位置にある。千石城跡のみが、白山神社(東種)が見える位置にあった。

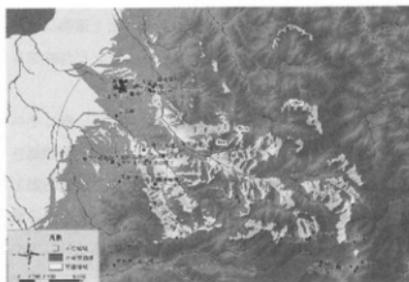
[4] 西種寺院跡(第27図) 西種寺院跡も観岳登山ルート上の遺跡と推定できるものである。その眺望においては、他の遺跡と平野がほとんど見えない(第26図)。他方、大辻山、大熊山、大日岳、奥大日岳、観岳の眺望は良好である。西種寺院跡も千石城跡から、眺望できる位置にある。

## 結 び

以上、観岳・立山山頂および黒川・護摩堂地区を中心とする主要遺跡からの眺望を復元して検討を加えた。これらの結果は、さらなる発掘調査の成果とあわせて検討するべきものであるが、山岳宗教遺跡を分析する上で眺望が重要な要素の一つであることを示すことができたとと思う。その現在の時点での評価を、予察を含めて以下のように示しておくたい。

- 1) 上市町内においては、観岳山頂からの眺望が立山山頂からの眺望より良好であるが、これら二つの霊峰の両方を眺望できる地点に特に重要な遺跡が存在する。

- 2) 真興寺は、剱岳山頂と立山山頂の両方を眺望でき、黒川・護摩堂地区の遺跡の多くを眺望できることから、山麓部の中樞寺院であったと推定できる。黒川・護摩堂地区の剱岳・立山山頂を眺望できない遺跡・平坦地のかかりが、真興寺を介して山頂からの眺望に連なっていた。
- 3) 日枝神社裏遺跡と黒川塚跡東遺跡のように古代に始まる遺跡は、立山は見えず概して眺望が閉鎖的な空間に位置する傾向が存在した。黒川・護摩堂地区において最も閉鎖的な空間にあった穴の谷霊場を含めて、これを古代の時代的な特徴として評価できるか否かが検討課題である。
- 4) 中世前期の墓地・経塚群については、黒川上山古墓群が剱岳山頂と立山山頂を眺望でき、円念寺山経塚群は剱岳山頂を眺望できる一方、他の遺跡の眺望や平野の眺望は特殊であり、独自の立地をもった可能性が高い。この中で黒川上山古墓群は護摩堂地区の遺跡と、円念寺山経塚群は真興寺と相互に見える関係があった。
- 5) 護摩堂城と千石城跡は、平野を広く眺望できることに特色がある。特に在地領主土肥氏が関与した中世後期の山城と推定できる千石城跡は、黒川・護摩堂地区だけではなく、立山寺を除いて上市町内の多くの山岳宗教遺跡を眺望でき、平野の眺望域も広大であって、その築造は剱岳信仰に大きな影響を及ぼした可能性が高い。他方、立山関連の遺跡・霊峰との関係は薄かったと推定できる。
- 6) 土肥氏の尊崇を受けた曹洞宗寺院である立山寺は、他の密教系山岳宗教遺跡とは眺望が排他的な位置にある一方、平野部に関しては広い眺望域をもっていた。
- 7) 剱岳登山の別ルート上にあると推定される白山神社（東種）、西種寺院跡は、霊峰の眺望を除くと閉鎖的な眺望域であったが、千石城跡はこの両者が見える位置に存在した。



第24図 千石山城からの眺望域



第25図 立山寺からの眺望域



第26図 白山神社（東種）からの眺望域



第27図 西種寺院跡からの眺望域

## 4. 黒川遺跡群の成立と変遷

上市町教育委員会 高慶 孝

### (1) 遺跡群の性格

黒川遺跡群は、山寺・僧坊・墓地・経塚が一体となった遺跡群で、それらが明瞭に確認できる全国でも数少ない遺跡群といえる。その成立と変遷について現在までの調査結果をふまえて考察し、さらに本遺跡群の性格について考えたい。

調査結果から得られた各遺跡の性格・年代は、以下のとおり。

黒川上山古墓群：67基に及ぶ墳丘墓群で、12世紀後半に成立／13世紀代に盛行／14世紀代に造墓活動中断／15世紀初頭に再興・終焉、という過程を辿る。

黒川塚跡東遺跡：僧坊跡・墳丘墓3基からなり、8世紀から12世紀後半までの須恵器・12世紀後半の珠洲焼を伴う。上山古墓群に先行する遺跡で、古墓群成立期に伴存。

伝承真興寺跡：本堂・塔・堂・岩垣・庭などからなる山寺、遺物は9世紀から18世紀までの時代幅を持つが、14・17世紀代の遺物は少ない。9世紀代に寺院として認識されていたかどうかは定かではないが、12・13世紀代には確実に成立しており、11・12世紀に成立／14世紀に衰退／15・16世紀再興／17世紀衰退／18世紀再興・移転廃絶、という経過を辿る。

日枝神社裏遺跡：山地麓を開削した僧坊跡で、14・15世紀の遺物が出土しており、現在の日枝神社が室町時代初めに成立したとされる伝承に合致している。

円念寺山遺跡：全体で24基以上に及ぶ経塚群で、全てが12世紀後半に集中して造営されている。出土遺物には経筒、青白磁の合子・小壺、銅鏡・短刀・火打金その他、密教法具である独結杵や磬など当時でも最高級の埋納品が納められていた。

これら5遺跡は、その遺跡ごとに消長を繰り返しているようであるが、12世紀後半から13世紀にかけて一様にその最盛期を迎えており相互に関連した遺跡、というより黒川の宗教空間を構成した宗教施設群であったことが確認された。この中で、黒川塚跡東遺跡や伝承真興寺跡で確認された8世紀ないし9世紀の須恵器などの遺物は、宗教活動とは限定できないがこの地域における何らかの人々の営みを示している。それが11世紀から12世紀になって宗教遺跡群の主要部分を占めることになる。遺物から見た両遺跡の発生は、古代にさかのぼるが、その立地は平野部に対してやや隠れた位置にあり、密教関連の遺跡であった可能性が強いことから、当初は山林修行の場として営まれた可能性が高い。

遺跡名／年代	9世紀	10世紀	11世紀	12世紀	13世紀	14世紀	15世紀	16世紀	17世紀	18世紀
黒川上山古墓群				■	■	■	■			
黒川塚跡東遺跡	■	■	■	■						
伝承真興寺跡	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
日枝神社裏遺跡						■	■			
円念寺山遺跡				■						

第28図 黒川遺跡群遺跡別存続期間

上古古墓群・円念寺山遺跡は、谷を挟んで対岸の尾根上という位置関係にあるが、やや先行して円念寺山遺跡の経塚群が造営を開始しその後以上に上古古墓群が造墓活動を開始することになる。円念寺山の経塚群・上古古墓群のよりしろとなる寺院は、真興寺が想定される。真興寺と円念寺山は相互に視認できる位置関係にある。真興寺と上古古墓群に視認関係はないが、円念寺山を介し相互の関係が生じるものと考えられる。

真興寺は、伝承から寛和2年(986)に高僧、真興僧侶により開山されたと言われる。真興僧侶は東密小島流の開祖で東寺(教護院護国寺)第1の長者となった人物で、高野山中興期(11世紀初頭)の南院の創建でも知られる。現在、真興寺は富山市伊勢町に移っているが、真言寺院として存在する。

これに対して他の4遺跡と趣を異にするのが日枝神社裏遺跡である。遺物で見る限り他の4遺跡が衰退期ないしその活動を終えた時期に出現する。他の遺跡との視認関係から見ると円念寺山遺跡のみ確認できるが、他の遺跡とは視認関係がない。この意味で日枝神社裏遺跡は遺跡群のなかでの宗教上の位置がやや異なるものと考えられる。

以上から本遺跡群は真言密教をその宗教上の基本理念においているものと考えられる。これに対して日枝神社は、天台密教と深くつながる社として知られる。この意味においても本遺跡群の中にあつて特異な意味があつたものかもしれない。

黒川地区の周辺に目を転ずると、黒川の谷奥、東方の山中に弘法大師止錫の地、護摩堂(ゴマンドウ)がある。現在でも護摩を焚いた弘法堂が残り、周辺には僧坊跡・塚などが点在する。この背後の山稜にでると霊峰剣岳が眼前に飛び込んでくる。この稜線をつたい大熊山・早乙女岳・大日岳・奥大日岳・室堂というルートがあり、立山信仰につながるものと考えられる。上市町には、真言宗の大岩山日石寺があるが、ここからも高峰山・大辻山・早乙女岳を介して室堂にいたるルートが想定され、さらに立山町の芦峰寺からのルートがある。こうした山上には塚や岩屋など小規模ながら遺跡が点在することが知られており、本遺跡群が立山信仰の入場口であつた事が想定される(第28図)。

## (2) 遺跡群の変遷

ここで黒川宗教遺跡群の変遷をまとめてみたい。

- 第1期(8~9世紀) 黒川塚跡遺跡・真興寺跡に見られる8世紀から9世紀の須恵器が出現する時期で、遅くとも9世紀半ばまでには宗教上の営みが開始された時期と捉えたい。この時期は立山連峰山中における宗教活動の開始期にも対応しており、鯉所山頂に錫杖頭・鉄剣が奉納されたり、大日岳で発見された錫杖頭もこの時期である。黒川においても山林修行の場として次第に整備されていったものと考えられる。
- 第2期(12~13世紀) 真興寺跡に寺院が出現し、黒川上古古墓群・円念寺山の経塚群が造営を開始する時期で宗教遺跡群としての諸要素がすべて整い、最盛期を迎える時期にあたる。この時期立山信仰においては立山開山記が確立し、信仰の中心が雄山を中心とする室堂周辺に移行する時期に当たる。上市町では大岩山日石寺の磨崖佛がこの時期に築かれており、11世紀末に不動明王・童子、13世紀末頃までに磨崖像と阿弥陀如来像が彫り足され、立山開山記が磨崖佛において具現化されていく。
- 第3期(14~15世紀) どの遺跡も衰退期もしくは廃絶期を迎える時期である。唯一、日枝神社裏遺跡のみその活動が認められる。この時期は、東国武士・土肥氏が砥園社領「堀江北」の荘官として現在の滑川市堀江に入部した時期に当たる。その後、土肥氏は16世紀末までに小森城・護摩堂城・千石山城・荻谷山城・稲村山城・柿沢城・弓庄城などの城館を築き、中新川一帯を支配していき、小森城・護摩堂城はそれぞれ黒川地区・護摩堂地区を見渡せる山上にある。また、千石山城は護摩堂から室堂に向かう尾根筋を切る形で大規模な切岸・空堀が配されている。こうしたことからこの時期、黒川遺跡群は土肥氏の統制・圧力を受けたものと考えられる。
- 第4期(16~18世紀) この時期活動があるのは、真興寺のみで17世紀には一時活動を停止している。18世紀初頭に

再興するが後期に入って移転し廃絶している。16世紀は織田勢と上杉勢との主戦場として越中全体が巻き込まれ、その中で土肥氏の中新川支配が終焉を迎え、代わって加賀の前田氏が越中支配を確立する。前田氏は、立山霊場への入場口に芦峯寺を推奨したり、それまで衰退していた上市大岩山日石寺を加賀藩の祈願所とするなど、信仰上の施策を展開する。宗教を弾圧するのではなく巧みに管理したのである。これにより黒川からの立山入場口は完全に忘れ去られることになったと考えられる。18世紀後期、真興寺の廃絶後は大岩山日石寺の僧長玄によって享保7年（1722）に本覚院が真興寺跡の麓に開かれる。平成8年に焼失するまでその法脈を守っていた。

以上、黒川宗教遺跡群の変遷をそれを取り巻く当時の社会情勢を加味して概観したが、立山信仰の聖地、室堂ではどのような変遷を辿るのであろうか。

室堂においては平成9年度に立山町教育委員会・富山大学合同の調査団が発掘調査を実施している。これによると、室堂における遺物の初現は9世紀である。この時期信仰の中心は観岳とそれを遙拝する大日岳であったようで、両霊峰でそれぞれ9世紀・10世紀の錫杖などが出土している。この時期を立山が霊場としての活動の開始期としている。その後、室堂における遺物はわずかながら連続と続くが、12世紀後期から13世紀にはその出土量が飛躍的に増大する。室堂の近世以前における最盛期としている。14世紀から16世紀にかけては極端に遺物の出土量が減少する。この時期台頭してきた武家勢力の影響・戦国争乱などの社会情勢が影響したものと考えられる。17世紀（近世以降）は再び遺物の出土量が増大する。近世立山信仰の本格的な展開期である。加賀前田氏の庇護により立山雄山を中心に据え、立山地獄との対比の中で立山曼陀羅の世界が開花した。

以上を立山1期～立山4期に区分し述べ、さらに立山信仰の中心が古代においては、観岳にあり、当初は神聖な霊山であるが故、また険険な峰であるが故に登ってはならない山と認識され、それが中時代を経る内に、登ってはならないという部分のみ残り、タブー視され、登ると災いが起きる恐ろしい山、地獄の針の山というように変容したと推定している。しかしながら中世後期ないし一部近世まで立山別山からの観岳遙拝行為が史料から読みとれること、立山浄土の雄山峰本社を拝めば、観木峰を遙拝する形となることから、観に対する信仰が完全に忘れられたわけではないとしている。

以上、立山信仰の中心である室堂についてまとめたが、これを黒川地区中世宗教遺跡群の変遷と対比させたのが第1表である。表の比較で2地域が見事にシンクロしているのが理解できる。前述したルートを介して黒川と立山霊場が深く関わる事が想定される。

第1表 黒川遺跡群と立山霊場の変遷比較

時期（年代）	黒川遺跡群			立山（室堂）	
	発生	遺跡の出現	山岳修験との結びつき	発生	遺物の出現
中世以前 （奈良～平安） 9世紀～11世紀	黒川1期	黒川遺跡東遺跡 伝承真興寺跡		立山1期	観岳・大日岳山頂遺跡
中世前期 （平安後～鎌倉） 12世紀～13世紀	黒川2期	遺跡群の盛行 黒川上山古墓群 円念寺山遺跡	密教との本格的な関わり 「霊場」の成立	立山2期	遺物の増加
中世後期 （南北朝～戦国） 14世紀～16世紀	黒川3期	黒川上山古墓群 ・真興寺跡の新絶	土肥氏など武士勢力の介入・ 尾根筋ルートの分断	立山3期	遺物の極端な減少
近世以降 （江戸～） 17世紀～	黒川4期	真興寺再興・廃絶	大岩山日石寺への加賀藩の 庇護・里寺の本化 尾根筋ルートの規制一廃絶	立山4期	遺物の激増 加賀藩による芦峯寺ルート の推奨・一本化



### (3) 結 び

以上、黒川遺跡群の性格と変遷について周辺地域の様相と比較しながら検討を行なった。越中は中世の文献史料が全国的に見ても極端に少ない地域である。源平合戦の頃の争乱、上杉・織田両勢力の戦場と化した戦国期に焼失・散逸した史料が多い中、ほとんど論じられることのなかった近世以前の立山信仰の一端を本遺跡群は語っているものと考えられる。現時点での評価を、予察を含め以下にまとめ結びとしたい。

- (1) 本遺跡群には、経塚・墓地・寺院・僧坊・行場など中世の密教に関わるあらゆる施設がいくつも密集して存在する。その出土物も当時の第一級のものが多く、全国的にも他に類をみない遺跡群である。さらに、これらの遺跡群が中世後半期のほぼ同時期に廃絶し、「忘れられた霊場」となっていた点、及びそれが継続的な調査によって確認されたという意味でも重要な遺跡群である。
- (2) 本遺跡群の背後には北アルプス立山連峰の霊峰・經岳を仰ぐことができ、本遺跡群の宗教的営みの根底にはこの經岳に対する信仰があったことは間違いない。また黒川の地からは尾根伝いに護摩堂―大熊山―早乙女岳―大日岳―奥大日岳を経て立山室堂へと至るルートが確認され、「立山信仰」との密接な結びつきが明白となった。加賀藩の肝煎りで隆盛した近世立山信仰の成立以前には、こうした「忘れられた霊場」が立山信仰を支え発展させた可能性が考えられる。
- (3) 黒川上山古墓群・伝承真興寺跡は14世紀代に一時的に途絶える。また標高約2600mの立山室堂遺跡でも、ほぼ同時期に遺物量が極端に減少したことが認められている。この時期は後に新川郡一帯を支配する東国武士「上肥氏」の越中入部及び勢力拡大の時期にあたり、立山へ至る尾根筋ルート上にはこうした武士勢力によって築かれた山城が点在するようになった。これによって従来の尾根筋ルートは分断あるいは統制を受けて衰退し、さらには近世、加賀藩による芦峯寺ルートへの一本化を経て、歴史から姿を消すことになったものと考えられる。
- (4) 日本歴史上、平安時代～鎌倉時代は、公家寺社と武家が連合・融合する中で、次第に新興の武家が力を強めていく思想・経済上の大きな変革期にあたる。本遺跡群の知見は、この時期における思想上の支柱であった寺社の壮大な営みの実態を物語るものである。またその衰退は、武家関連遺跡の動向と密接に関連づけて理解できるものであった。この成果は、当時の日本各所で起こったであろう社会変革の実態を解明する上で、貴重な事例になるものである。

# 報告書抄録

ふりがな	とやおれんかひい ちまちくるのみい せきぐんはつかつちようさひこくしよ						
書名	富山県上市町黒川遺跡群発掘調査報告書						
編著者名	高慶孝・宇野隆夫・山口欣志・久保智康・今西寿光 (機械執筆者を除く)						
編集機関	上市町教育委員会						
所在地	〒930-0393 富山県中新川郡上市町法音寺1番地						
発行年月日	平成17年2月28日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
くろかわやまにぼく 黒川上山古墓群	富山県中新川郡 上市町黒川	016322 322034	36度43分01秒	137度24分11秒	19940513～19940727 19961107～19961217	3,000㎡	道路敷設及び 遺跡整備のため の資料収集
くろかわのほろいせ 黒川原跡東遺跡	同上	016322 322114	36度43分01秒	137度24分12秒	19970821～19971007	5,500㎡	遺跡整備のため の資料収集
でんねんじやまに 伝承 真興寺跡	同上	016322 322115	36度43分12秒	137度23分59秒	19981008～19990331 19990927～20000331	3,200㎡	同上
ひえんじやまに 日枝神社裏遺跡	同上	016322 322117	36度42分59秒	137度24分05秒	20000612～20010331	1,500㎡	同上
えんねんじやまに 円念寺山遺跡	同上	016322 322118	36度42分52秒	137度24分09秒	20000612～20010331 20010716～20020331	1,100㎡	同上
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
黒川上山古墓群	散布地	縄文	穴・溝	縄文土器・石器	総数67基以上に及ぶ大規模中世 墳丘墓群を確認		
	墓地	中世	墳丘墓 土壌墓 集石	土師器(皿) 珠洲(壺・片口鉢) 白磁(四耳壺) 石製品(五輪塔・板碑)			
黒川原跡東遺跡	社寺跡	古代	礎石建物跡 掘立柱建物跡 石垣	土師器(皿) 須恵器(壺・甕・杯・杯蓋) 珠洲(壺・甕)	黒川上山古墓群を遡る宗教施設群 を確認		
		中世	集石	金属製品(釘)			
伝承 真興寺跡	社寺跡	古代	礎石建物跡 池跡	土師器(皿) 須恵器(壺・甕・杯・杯蓋) 珠洲(壺・甕・片口鉢) 越中瀬戸(鉢・皿・甕) 唐津(掻鉢)	本堂・堂・塔・山門を有する本格的 な伽藍の中世山林寺院を確認		
		中世	土壌 石垣 石段 集石	伊万里(鉢) 石製品(五輪塔・砥石) 金属製品(鉄・銅・釘)			
日枝神社裏遺跡	社寺跡	古代	礎石	土師器(皿) 須恵器(杯蓋)	執権儀式に関わるものと考えられ る土嚢を検出		
		中世	土壌 集石	珠洲(壺・甕・片口鉢) 石製品(砥石) 金属製品(鉄・銅・釘)			
円念寺山遺跡	経塚	中世	縄縵 石柵 集石	土師器(皿) 珠洲(窪筒外容器・四耳壺・壺・片口鉢) 青白磁(合子・小壺・皿) 石製品(硯)	少なくとも23基以上からなる全国 屈指の大規模経塚群を確認		
				金属製品(鉄・銅・釘・火打金)			

富山県上市町

**黒川遺跡群発掘調査報告書**

発行日 平成17年2月28日

編集・発行 上市町教育委員会

印刷 株式会社チューエツ

# 富山県上市町 黒川遺跡群発掘調査報告書

## 付 図

- 1 黒川上山古墓群遺構配置図
- 2 黒川上山古墓群1号墓～7号墓配置図
- 3 伝承真興寺跡遺構実測図
- 4 伝承真興寺跡遺構実測図
- 5 伝承真興寺跡遺構実測図

2005年2月

上市町教育委員会

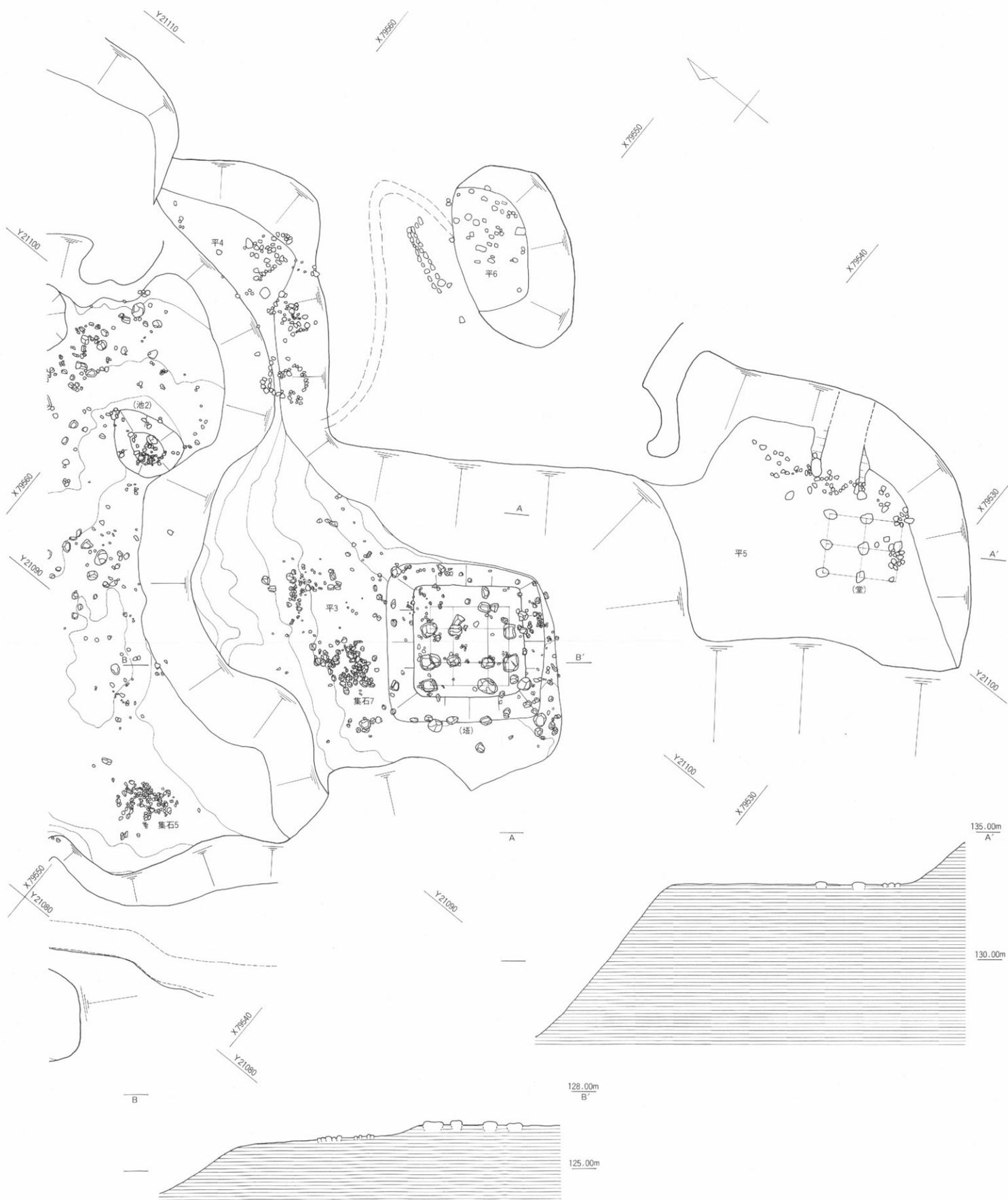


付図1 黒川上山古墓群遺構配置図  
(1/50)



付図2 黒川上山古墓群1号墓～7号墓配置図 (1/50) (XY14国土座標)





付図4 伝承真興寺跡遺構実測図 (縮尺1/100) 平坦面3 (塔跡)・平坦面4・平坦面5 (堂跡)・平坦面6





